

2025年9月留学報告書

島根大学大学院自然科学研究科 青木待心
n25ni01@natsu.shinane-u.ac.jp

1 はじめに

島根大学大学院自然科学研究科の青木待心です。2025年8月から12月までの期間、島根大学の交換留学制度を利用し、インドのカルナータカ州バンガロールにある Indian Institute of Science, Bangalore (以下、IISc) の Department of Design and Manufacturing に留学しています。

バンガロールは、インドの IT 産業の中心地であり、経済・人口ともに大規模な都市として知られています。東南アジアから南アジアの都市特有の雰囲気が好きであることや、日印関係が、産業を始めとする様々な分野で大きな役割を担っていること、幅広い技術やデザインに触れたいという思いから今回の留学を選択しました。今後、インドでの生活や留学を通して学んだことについて報告します。

2 日本出国～IISc 到着まで

1. 日本出国～インド入国

7月末に、成田発バンガロール行きの飛行機で出国しました。インドへの到着は深夜でしたが、空港の到着ゲートを出ると、すれ違うたびにタクシーの客引きから声をかけられ、ついにインドに来たことを実感しました。入国当日は深夜だったため、空港近くのホテルで一泊しました。

2. IISc 到着

翌日、ホテルから IISc に到着し、まずは5ヶ月間滞在する寮にチェックインしました。この施設は、私のような交換留学生や共同研究者、学会などでの来訪者が主に宿泊する場所です。その後、受け入れ先の指導教員が学内の案内やラボの紹介をしてくださり、IISc での生活が始まりました。



図1 IISc の Main Building

3 留学生活のいろいろ

3.1 IISc について

IISc は、1909年に創立された国立の高等教育機関です。学生のほとんどは博士課程であり、主に理系分野の

研究科が設置されています。ノーベル物理学賞を受賞した C.V. Raman が過去に学長を務めていたことでも知られています。ちなみに、C.V. Raman の銅像が松江キャンパスに設置されていますが、ご存知でしょうか。

3.2 キャンパスについて

キャンパスは、バンガロールの繁華街からは少し離れていますが、周辺には大きなモールや市内を縦断する鉄道の駅がある他、キャンパス内にもグラウンド、ジム、スーパー、住居、銀行などが併設されているため、特に不自由なく生活を送ることができます。キャンパスは島根大学と比較してかなり広く、バイクや自転車、無料のオートリキシャが主な移動手段になっています。また、キャンパスのほとんどが豊かな植物で覆われているため、落ち葉や動物（犬やリス、猿など）が多く、森の中のような雰囲気です。



図2 IISc のメインロード

3.3 食事について

キャンパス内では、寮の食堂、キッチンカー、フードコートで食事をとることができます。ビリヤニ、ドーサ、ワダ、チャパティ、パパド、イドゥリ、ラッサム、サンバル、ラッシー、チャイといった日本では馴染みのないメニューばかりです。寮の周辺にはファストフード店が点在しており、少し離れた地域には日本料理店も複数あるため、インド料理以外の食事も楽しめます。キャンパス内外のインド料理の物価は比較的安く、一食約200ルピー（1ルピー＝約1.7円※2025年9月時点）以下で済ませることができます。ベジタリアンへの対応が充実しており、メニュー表にはベジタリアンか、ノンベジタリアンかが分かりやすく記載されています。



図 3 ドーサとチャイティー

3.4 学業について

現在、Human Computer Interaction に関する講義を受講しています。また、研究室の博士課程の学生の研究を見せていただいたり、国内外から多くの研究者が訪れるため毎日開催されるセミナーに参加したりと、インプットに努めています。それと並行して、研究室の機材を使い、プロトタイピングによるアウトプットも行っています。

3.5 言語について

元々、英語が堪能ではないことに加え、インド英語特有の発音やイントネーションに苦戦し、聞き取れないことがあります。聞き返すとゆっくり話してくれたり、別の言葉で言い換えてくれたりしますが、インド英語も正確に聞き取れるようになりたいです。

また、カルナータカ州の公用語はカンナダ語のため、看板にはカンナダ語の表記があります。インド全土から学生が集まっているため、ヒンディー語を話せる学生も多く、英語以外の言語にも触れていきたいと思っています。



図 4 キャンパス内の看板 (上から、カンナダ語、ヒンディー語、英語)

3.6 キャンパス内でのイベントについて

IISc では、研究関連のイベントだけでなく、学生が主体となって様々な催しが開かれます。8 月末には、ヒンドゥー教の神であるガネーシャの誕生を祝う祭りがキャンパス内で行われました。インドでは人口の約 8 割がヒ

ンドゥー教徒ということもあり、祭りは大変な賑わいでした。ヒンドゥー教は比較的寛容な宗教とされ、私のようなヒンドゥー教徒以外でも祭りや寺院への立ち入りが許されているため（地域差はあるようです）、私も多くの人と一緒にガネーシャの誕生を祝いました。



図 5 ガネーシャの像

4 おわりに

この報告書を執筆している 9 月初旬時点で、留学開始から 1 ヶ月が経過しています。ラボのメンバーやキャンパスで出会う博士課程の学生や研究者、職員の方々がよく気にかけてくださり、日々安心して生活することができている一方で、少しずつ学内外のコミュニティに参加することができており、コンフォートゾーンの確立とそこから飛び出していくことをバランス良く進められていると感じています。限られた留学期間で、より多くのことを学び、吸収できるよう、残りの期間も一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。